

60

## 医学士千原春甫の徳島県赴任と 甲種徳島医学校の開校・廃校について

梶谷 光弘

(公財) いつも財団

慶応4(1868)年2月, 高階筑前介は政府へ西洋医術採用を建白し, 翌月, それが決定した。明治3(1870)年になり, 医学校取調御用掛の相良知安と岩佐純は, それまでのオランダ医学, イギリス医学ではなくドイツ医学を採用し, 同4年8月に来日し東校に着任したミュルレルはドイツ医科大学をめざし, 医学教育改革を開始した。明治15(1882)年, 「医学校通則」が制定され, 東京大学医学部を中核として進められてきたドイツ医学の浸透・定着は, 地方へと向かった。だが, この頃に開校した甲種医学校の多くは短命だった。

### 1. 史料

史料は, 広瀬淡窓門人千原秀齋が「(明治)十六年十月, 学位ヲ拝シ」た「(長男)春甫ノ英名ヲ伝えるために綴った「孝慈南遊日誌」(田中真生雄・光子氏所蔵, 全71丁)を中心とする。

### 2. 乙種徳島医学校から甲種への昇格・開校

千原春甫(1858-1916)は, 明治5(1872)年8月, 島根県から東京へ出, 東校助教授三崎嘯輔の私塾などでドイツ語を学んだ。同7年11月に東京医学校予科へ入学して3年間, 続いて東京大学医学部本科へ進んで5年間学び, 同15年11月に全科の授業を終えた。翌年2月から卒業大試問を受け, 4月に「及第」を告げられ, 5月24日, 医学部長三宅秀, 総理加藤弘之から「東京大学医学部卒業証」を授与され, 徳島県への奉職を命ぜられた。7月3日, 徳島県は, 千原へ「徳島医学校一等教諭」「徳島病院御用係兼務」を命じ, 同月, 文部省の認可を得て乙種から甲種に昇格させた。千原と劉小一郎の赴任が内定した段階で, 医師養成を急務と考えていた徳島県は甲種への昇格を文部省に申請したと思える早さだった。10月2日に開校式を挙行し, そして翌日に行われた器械展示には5,000名を超す参観者があり, 県民の期待も大きかった。同月27日に東京大学学位授与式が行われたが, 千原は「遠県奉職」の上, 医学校の入学試験準備等により出席できなかった。

### 3. 甲種徳島医学校の維持

甲種徳島医学校・病院の職員は, 校長・院長の準医学士三浦浩一を筆頭に, 一等教諭・病院御用係の医学士千原春甫・劉小一郎ら総勢12名だった。また, 新たに定めた学科は, 「理学, 化学, 植物学, 動物学, 解剖学及其実地演習, 組織学及其実地演習, 生理学附胎生学……」であり, 「東京大学医学部別課医学生徒学科課程」(明治15年)を真似ていた。ここには「ドイツ語」がなく, 別課同様, 日本語で授業が行われたにちがいない。

ところが, 明治16(1883)年の生徒数は前年の100名から55名に減少し, 歳費も5,674円から7,887円へと増えた(「文部省年報」)。さらに, 併設していた徳島病院の患者数も7,286名から5,857名へ減少し(『徳島市史』), 予想もしていなかった課題に直面した。

### 4. 甲種徳島医学校の廃校

「東京大学医学部分校」とも称せられた甲種徳島医学校は, 松方正義による財政緊縮政策下, 明治17・18年の歳費が8,700円を超える一方, 患者数は回復せず, 県財政を一層逼迫させた。また, 明治17~18年は卒業生が出ず, 甲種昇格の主たる理由だった医師の確保は期待できない上, 徳島病院での診察が医学生教育の一環であり, 午前中を中心とした診察は医学士や患者にとって不満足な状況だったと思われる。

千原春甫は明治17(1884)年10月に依願退職し, その後, 帰県して開業した。一方, 甲種徳島医学校は, 同19年4月(『徳島県史』), 地方税から府県立医学校の費用への支弁を禁じる勅令第48号(同20年9月)を待たず, その1年半も前に廃校となった。